



しづさわさんの

大きな銅像

洪沢栄一と養育院

絵と文 宮本孝一

東京都健康長寿医療センター
老年学情報センター

目次

- 1 大正時代の大きな銅像
- 3 日本に欧米型の商工業を根付かせた渋沢
- 7 養育院
- 11 渋沢栄一はなぜ養育院の院長に？
- 12 多くの人々が仕事を失った東京
- 15 生活に困った人を助けるしくみ
- 16 他のことに使われてしまった七分積金
- 17 七分積金の本来の使い道を求めた大久保一翁府知事
- 18 急いで東京中の浮浪者を隠せ
大久保一翁、渋沢栄一を七分積金の管理役に
- 20 渋沢栄一の七分積金の使い方
- 21 渋沢栄一、養育院院長になる
- 22 養育院の存続を説得
- 24 養育院は自分がひきとる
- 25 養育院、東京市の市営施設に
- 28 貧困で苦しむ人が急増
- 29 渋沢栄一、貧困問題の考え方が変わる
- 31 再び大きな戦争
- 33 道徳経済合一説
- 34 養育院、板橋へ そして銅像の建立
- 36 銅像建立、その後
- 37 渋沢栄一が亡くなったあとの日本
- 38 安定した生活を得て生きる権利

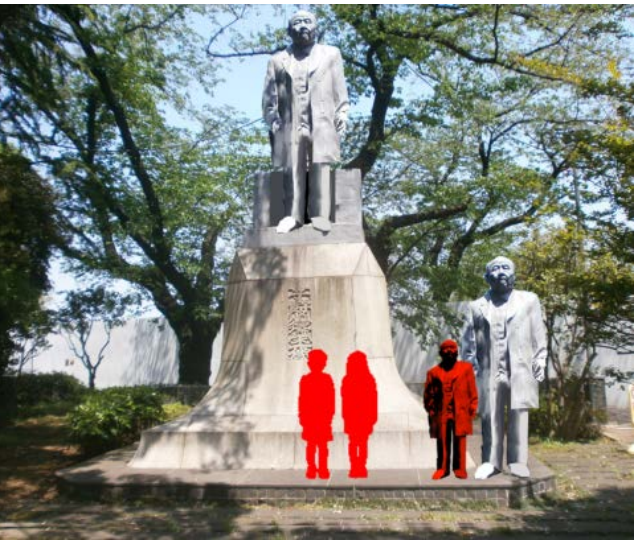


大正時代の大きな銅像

板橋区の東武東上線大山駅の近くに東京都健康長寿医療センターという病院があります。

その病院の敷地に、大きな銅像があります。大正時代に作られた銅像です。銅像の人物は**渋沢栄一**という人で、この場所にあった**養育院**という施設の院長でした。

養育院は一八七二(明治五)年に始まりましたが、そのときは別の場所でした。



銅像は、二〇一三(平成二十五)年に板橋区の有形文化財に登録されました。

銅像の高さは約三・八mで、*青銅でできています。石の台座の高さは約四mあります。

銅像はもともと、現在の板橋第一中学校がある場所に作られました。板橋第一中学校や文化会館があるところも、かつては養育院の敷地だったのです。その後、現在の場所に来るまで銅像は四回も引っ越しをしました。

銅像の大きさを、小学4年生の身長(約140cm)と比べてみます。

右はじは渋沢栄一です。渋沢栄一の身長は150cmぐらいでした。現代の小学5年生と同じぐらいです。

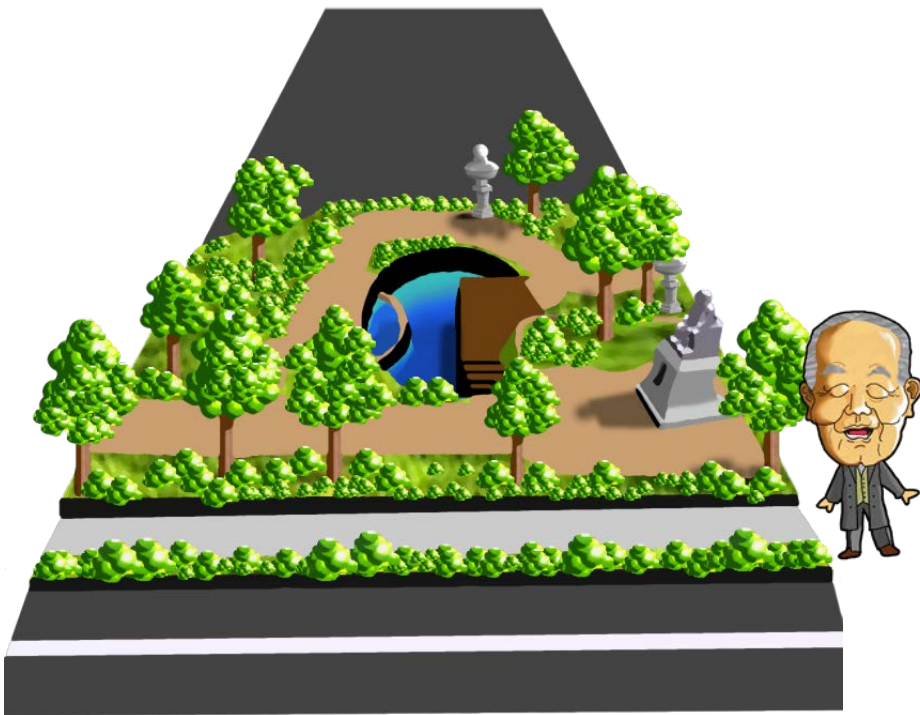
銅像がもし立ち上がったら、どのぐらいの高さになるでしょうか。本物の銅像を見ながら想像(そうぞう)してみましょう。



* 青銅…銅(どう)と錫(すず)の合金。とがしやすいことから、古代のさまざまな道具から現代の芸術(げいじゅつ)品まで、世界中で広く使われてきた金属です。10円硬貨(こうか)も青銅です。



太平洋戦争のとき、兵器の材料となる金属が日本中から集められ、銅像も兵器の材料としていったん台座から降ろされました。そして代わりにコンクリートでできた像が台座に置かれたといえます。銅像は、運び出される前に戦争が終わり、再び台座にすえられました。



青銅は、さびると青みのある緑色になります。
 渋沢栄一の銅像もさびた青銅の色でしたが、2002（平成 14）年に灰色の塗料（とりょう）で塗装（とそう）されました。

日本に欧米型の商工業を

根付かせた渋沢

江戸幕府から明治政府に切り替わった、その境目の混乱の時期、渋沢栄一（二十七歳）は幕府の命令でヨーロッパにいました。

將軍の弟である徳川昭武がパリ万博に出かけ、そのまま現地でヨーロッパの社会のしくみを学ぶことになりました。將軍の家来だった渋沢栄一も同行を命じられたのでした。渋沢栄一はヨーロッパで、日本とはまるでちがう社会のしくみを知り、日本も同じようなくみを積極的にとりいれるべきだと考えました。

徳川昭武はしばらくヨーロッパで留学する予定でしたが、新政府の命令で全員帰国することになりました。



渋沢はもともと武士ではなく、武蔵国血洗島村（いまの埼玉県深谷市）の裕福な農家の生まれでした。渋沢家は自分の土地で栽培した藍や農家から買い取った藍で、布地を染める染料（藍玉）を作り、長野・栃木・埼玉の紺屋（布地を染める店）に販売していました。

藍は青紫色の染料がとれる植物です。

子どものころから実家の仕事を学んでいた渋沢栄一は、ヨーロッパの商工業と江戸時代の日本の商工業のちがいを知り、ヨーロッパの商工業のしくみを、ぜひとも日本で実行したいと思いました。

藍（あい）の色は、濃（こ）い青



江戸時代は、商業は身分の低い仕事とされてきました。しかし、ヨーロッパはちがいました。ヨーロッパのような工業のしくみなら、誰にも見下されることのない、国の中でもっとも重要な職業になると渋沢は考えました。



日本に帰国した渋沢栄一は、ヨーロッパで見た体験をもとに新しい商工業のしくみ「合本主義」を考案しました。

合本主義とは、①会社をつくって世の中に役立つ仕事をしたい人が、多くの人から少しずつお金を集めて商工業を行い、②商工業が世の中の役に立ち、③会社の仕事で得られた利益は、お金を出した人や働く人に分配し、

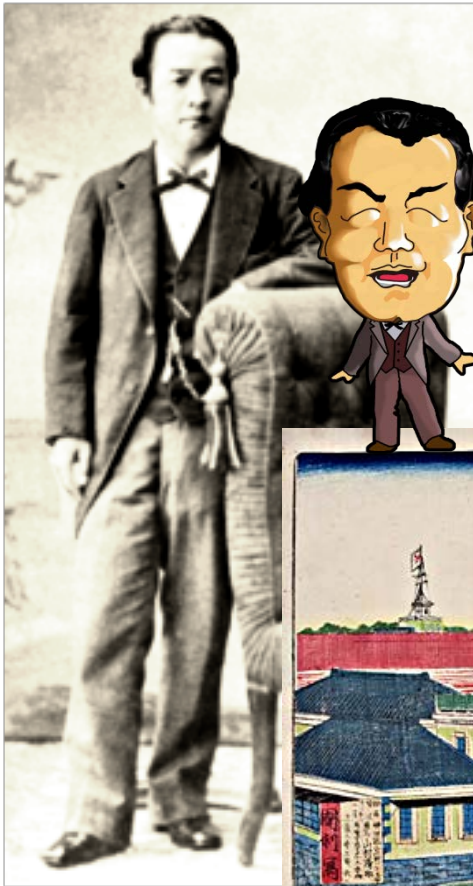
①②③により日本全体がお金持ちになり、人の生活が豊かになるという考えです。

渋沢は、元将軍の徳川慶喜が暮らす静岡藩で商法会所という会社をはじめたのですが、すぐに新政府から呼び出されて明治二年から大蔵省に勤めることになりました。大蔵省では郵便制度・鉄道建設・電気通信開始、新しい税金制度、銀行設置に関する法律づくりなど、社会の新しいしくみづくりに関わりました。

その後、渋沢は一八七三(明治六年)に大蔵省を退職して、合本主義を理想とする商工業づくりに取りかかりました。

明治時代に武士という身分は無くなりましたが、今度は「役所の役人が社会で最も偉い。商業は身分の低い卑しい仕事だ。」と考える人がたくさんいました。渋沢は日本をヨーロッパのような商工業のしくみで成り立つ、商人が尊敬されるような国にしようと考えました。

渋沢栄一はまず日本最初の銀行「第一国立銀行」(現
 だいいちこくりつぎんこう
 在のみずほ銀行)をつくりました。渋沢がヨーロッパで知っ
 た銀行という会社は、合本主義がっほんしゅぎの商工業に必要なものでし
 た。



第一国立銀行



商工業を始めるには多額(たがく)のお金が必要です。お金を貸(か)してくれる人をたくさんさがすのはたいへんです。貸すほうも、相手がちゃんとお金を返してくれる人(会社)かどうかを自分で調べるのはたいへんです。そこで、多くの人からお金をあずかり、商工業を始めたい人で信用(しんよう)できる人にお金を貸す、専門の会社があると便利です。それが銀行の役割です。渋沢の合本主義の考え方でも銀行が必要です。

①たくさんの人が
銀行にお金を
あずける。



銀行

②商工業をはじめたい人が
銀行からお金を借(か)
りる。

③借りたお金で会社を作り、
必要な人や機械(きかい)を
そろえる。



④商工業で収入を得る。



⑤銀行にお金を返す。
借りた金額より多く。

⑥銀行にあずけた
お金が増えていく。



銀行

まめちしき…第一国立銀行は「国立」といっても国がつくって運営する銀行ではありません。アメリカの「ナショナルバンク」(国の法律にもとづく銀行)を国立銀行と訳したもので、第一国立銀行は国立銀行ではなく民間会社です。

渋沢栄一が設立に関わり、現代も残る会社の例（東京商工会議所ホームページより）

・・・多すぎて、ここではすべての会社を書ききれません。

ニッセイ同和損害保険／全国各地の地方銀行／アサヒビール／イオン／いすゞ自動車／王子製紙／小田急電鉄／カネボウ化粧品／川崎重工業／関西電力／京王電鉄／サッポロビール／時事通信社／澁澤倉庫／大日本印刷／帝国ホテル／電通／東京ガス／東レ／清水建設／損害保険ジャパン日本興亜／東京海上日動火災保険／日本放送協会／日本経済新聞社／博報堂／富士フイルム／JR／富士ゼロックス／毎日新聞社／三井物産／りそな銀行／みずほ銀行／三越伊勢丹など



渋沢は、三十三歳のときから六十九歳までの間に、たくさん
の会社づくりに関わりました。渋沢栄一自身が作った
会社と誰かの会社づくりに関わった会社を合せると、約五
百社にもなります。その多くは、現代も有名企業として
経営をつづけています。

会社づくりに取り組んだ渋沢は、六十九歳で多くの会
社の運営から離れました。その後は九十一歳で亡くなる
まで、生活に困る人々を助ける事業に熱心に取り組ま
した。



さて、しぶさわさんの大きな銅像がまだ出てきませんね。
その前に、銅像が建てられた**養育院**とはどんな施設なの
かを見ていきましょう。

養育院

板橋区にあった養育院は、とても広い施設でした。

現在の板橋第一中学校や文化会館ももとは養育院の敷地でした。



養育院の敷地



「養育院百年史」より



大塚にあった養育院

「明治三十二年度東京市養育院第二十八回年報」

板橋区に来る前は文京区大塚にありましたが、建物の傷みがはげしいことや、養育院の役割が増えたこと、人口が増えて大塚のあたりにも住宅を増やす必要があったことなどから、板橋区にあった広い土地により大きな施設をつくって移転することになりました。

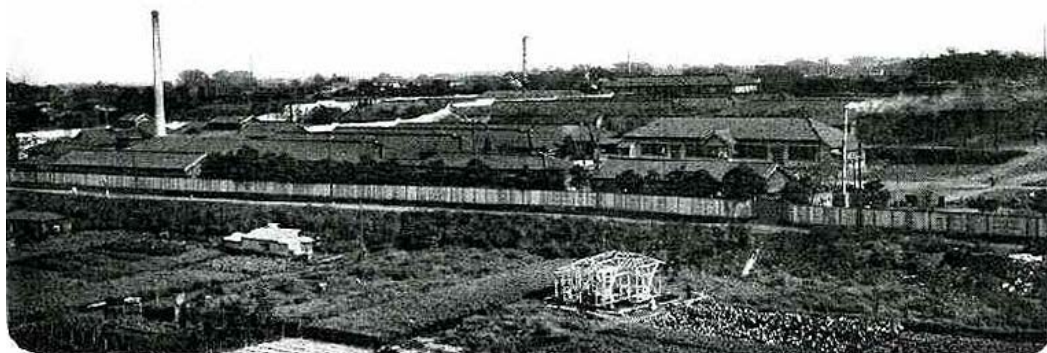
板橋競馬場があった広い土地に養育院の新しい建物がだいたいできあがったころ、関東大震災が起きて大塚の養育院は壊れてしまいました。

まめちしき…養育院や現在の豊島病院を含む土地に広い競馬場がありました。明治 41 年にオープンしましたが、その年にたった 3 回競馬が行われただけで、1 年もたたずに廃止になりました。

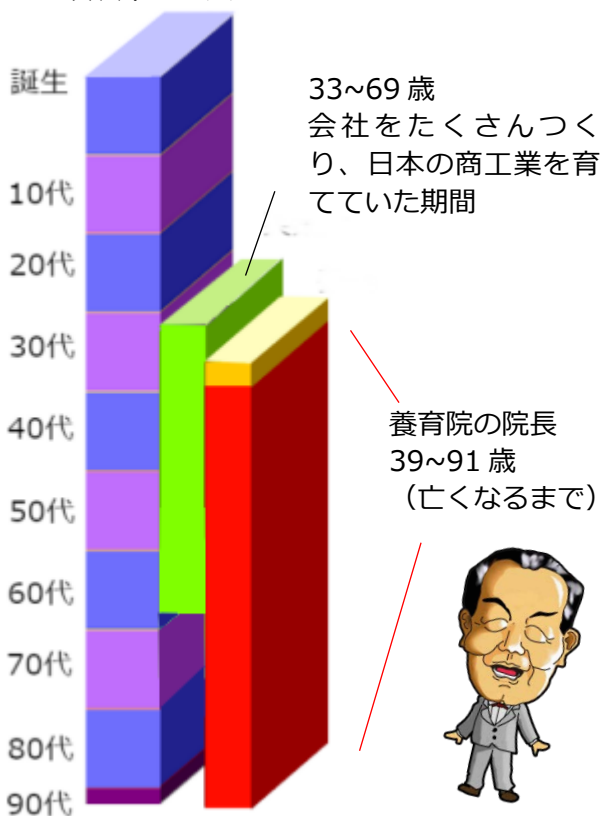
そこで板橋の新しい施設が完成する前に、大塚の施設にいた人たちは板橋に引っ越しました。

これが、板橋での養育院のはじまりです。一九二三（大正十二）年のできごとです。

板橋の養育院
いまの豊島病院のあたりから撮影



渋沢栄一の人生



養育院の院長は渋沢栄一でした。

渋沢は三十九歳から九十一歳で亡くなるまで、五十年以上も養育院の院長を続けました。それは、渋沢栄一が日本にたくさん会社をつくった年月よりもずっと長い期間です。

関東大震災で大塚の養育院が壊れ、板橋で新たに養育院をスタートした時も、渋沢栄一が養育院の院長でした。



養育院で撮影された
渋谷栄一



養育院の始まりは一八七二(明治五)年です。

文京区本郷の加賀藩の屋敷で始まりました。現在東京

大学がある場所です。

それから、上野、神田、本所(今の錦糸町駅近く)、大塚と移転を繰り返し、最後に板橋に移りました。

養育院の仕事は時期によってちがいがありません。

養育院が二〇〇〇(平成十二)年に廃止されるまでの間に行われた仕事は、次のようなものでした。

お金がなく、住むところがない大人が生活

お金がなく野宿をしていた人 ● 病気やけがで働けなくなった人 ● 刑務所を出て行き先のない人

貧しい子ども

不良少年・不良少女を住まわせて教育 ● 目や耳、発声に障がいがある子どもの教育 ● 養育院内幼稚園 ● 保護者がいない子どもが生活 ● 捨て子をあずかって子育て ● 親がいない子どもを育ててくれる里親さがし ● 戦争で両親を失った子どもが生活

病気の治療

養育院で暮らす人の病気の治療 ● 体が弱く病気がちな子どもを気候のいい場所で生活 ● 洪水や感染症の流行など東京中で被害者がたくさん出たときの治療 ● 看護師や産婆さんの学校 ● 医療の発展のための研究

お金を稼ぐ仕事の提供

院内作業所で製品づくり ● 東京の各地で公園の清掃 ● 仕事を紹介する紹介所を運営 ● 仕事を探している人が住む宿泊所を運営 ● 家賃の安い住宅を設置 ● 障がいを持つ人が働いて生活する農場

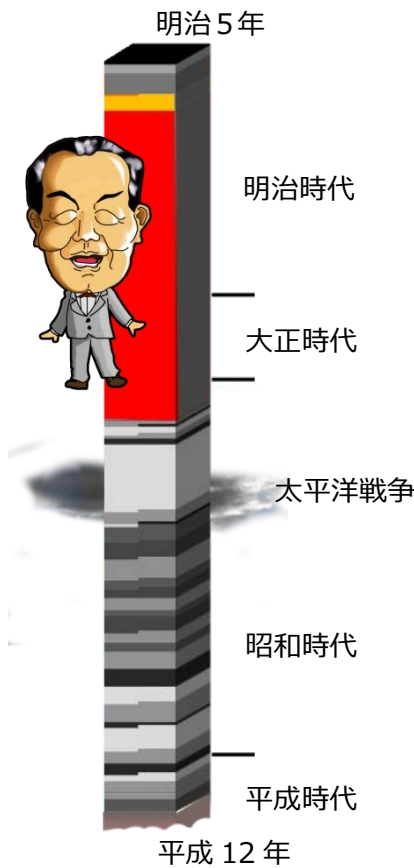
高齢者のための施設

いろいろな種類の老人ホーム ● 高齢者専門の病院 ● 老化が起きるしくみや高齢者特有の病気の研究 ● 高齢者の生活に役立つ社会のしくみの研究

さまざまな理由から働いてお金を得ることができず、生活に必要な食べ物・着るものを買えず、住むところもなくて生活に困っている人たちを一手に引き受ける施設が養育院でした。

明治五年に始まった養育院は、のちに東京都庁の一部門になり二〇〇〇(平成十二)年に廃止されるまで、約百三十年続きました。

その長い歴史の中で、渋沢栄一が院長を勤めていた時期はどのぐらいの長さになるでしょうか。



赤い部分が、渋沢栄一が院長だった時期です。赤の上に黄色い部分がありますが、このときは院長という役職はなくて事務長が養育院の代表者でした、その事務長も渋沢栄一でした。

約百三十年にもおよぶ養育院の歴史で、そのほぼ半分の期間は渋沢栄一が院長だったのです。

渋沢栄一は養育院の経営だけでなく、貧しくて生活に困っている人を助ける団体の設立を助けたり、貧困で苦しむ人を減らす対策を呼びかけたりして、貧困問題の改善に取り組みました。

さて、大塚から養育院が板橋に移り、建物の工事が終わるころ、東京市長を中心に、「渋沢栄一が五十年にわたり養育院運営を続けたことを讃えて銅像を建てよう」という計画がはじまりました。

「東京市民から寄付金を集めて銅像を作り、養育院に寄贈しよう」というものです。

この計画を渋沢栄一は断ったそうです。

銅像の建造を計画した人たちが熱心に渋沢栄一を説得したことで、渋沢栄一も銅像建立を受け入れ、一九二五（大正十四）年にしぶさわさんの大きな銅像が完成しました。今から約百年前のことです。



渋沢栄一はなぜ養育院の院長に？

渋沢栄一はどのようにして養育院の院長になったのでしょうか。貧しい人を助ける施設づくりを提案して、養育院をつくったのでしょうか。

養育院は、東京府の府知事が* 営繕会議所という団体に問いかけてつくらせた施設です。渋沢栄一はその当時は大蔵省の職員です。養育院づくりには関わっていません。

渋沢栄一が養育院経営の代表者になったのは養育院ができて四年後の一八七六（明治九）年です。養育院の事務長という役職でした。

渋沢が事務長に就任するまで、一八七三（明治六）年から飯田直之丞という人が養育院の院長でした。

渋沢栄一が養育院院長に就任したのは一八七九（明治十二）年。養育院が始まってから七年たっています。その年に事務長という役職の名前が院長に変更されて、事務長の渋沢栄一が院長になったのです。

まめちしき…渋沢栄一が養育院の事務長になると、飯田直之丞は養育院掛（かかり）という役職になり、院長という役職は無くなりました。渋沢栄一が事務長から院長になると、直之丞は養育院の副幹事（ふくかんじ）という役職になりました。

どういいういきさつで、大蔵省の職員だった渋沢栄一が、すでに始まっていた養育院に関わるようになったのでしょうか。

その話の前に、幕府が終わり新しい国づくりが始まったときの東京の様子をみていきます。

明治元年に渋沢栄一がヨーロッパから帰ってきたとき、なぜか東京中に貧しい人々があふれていました。

?!



うしな

多くの町人が仕事を失った東京

江戸は、現在の東京二十三区より小さい都市でした。江戸全体は幕府の土地で、その大半は武士が住む武家地でした。地図のオレンジ色の部分が武家地です。そこに江戸城と全国の大名の広い屋敷がありました。江戸の人口の半分は武士で、武家地に住んでいました。

江戸の住民の半数は商人や職人、建物や土地を人に貸す地主などで、町人と呼ばれていました。町人は武家地に挟まれた狭い町に住んでいました。町人が住むことができたのは地図の緑色の部分だけです。

武家

大名・家族・家来(けらい)・幕府に勤(つと)める武士



灰色は東京 23 区



町人



最後の将軍
徳川慶喜（よしのぶ）



一八六七（慶応三）年に将軍徳川慶喜は江戸幕府の政治をやめることを宣言しました（大政奉還）。慶応四年には江戸城を明治政府に引き渡し、静岡に移り住みました。将軍の家来の多くは慶喜とともに静岡に引っ越しました。



武家屋敷は
無人の空き家に

江戸の大名屋敷に住んでいた武士も一斉に全国各地の自分の藩に帰ってしまいました。江戸の人口の半分が突然いなくなってしまったのです。

江戸から人がいなくなると、残された町人の仕事も無くなり、暮らしに必要なお金を得ることができなくなりました。お金が無ければ食べ物も服も買えません。町人の多くは家賃を払って長屋に住んでいましたが、長屋に住むこともできません。

明治元年に渋沢がヨーロッパから帰国したときには、住むところも食べるものも無い貧しい人が東京中にあふれていたのです。

渋沢栄一は「働きたくても仕事がなく、食べるものもない貧しい人が急に激増して、飢えて動けなくなって道に横たわっている人は数知れなかった。東京の町のひどいありさまは、とてもことばで言い表せないものだった」という意味のことを書き残しています。

まめちしき…江戸にいた武士の大半が全国の自分の藩（はん）に帰ったとき、身分の低い武士は連れて行ってもらえず、仕事も給料もなく、その人たちも東京で貧民（ひんみん）になりました。

左のグラフは、明治二年に東京府が東京の町人について行った人口調査の結果をグラフにしたものです。

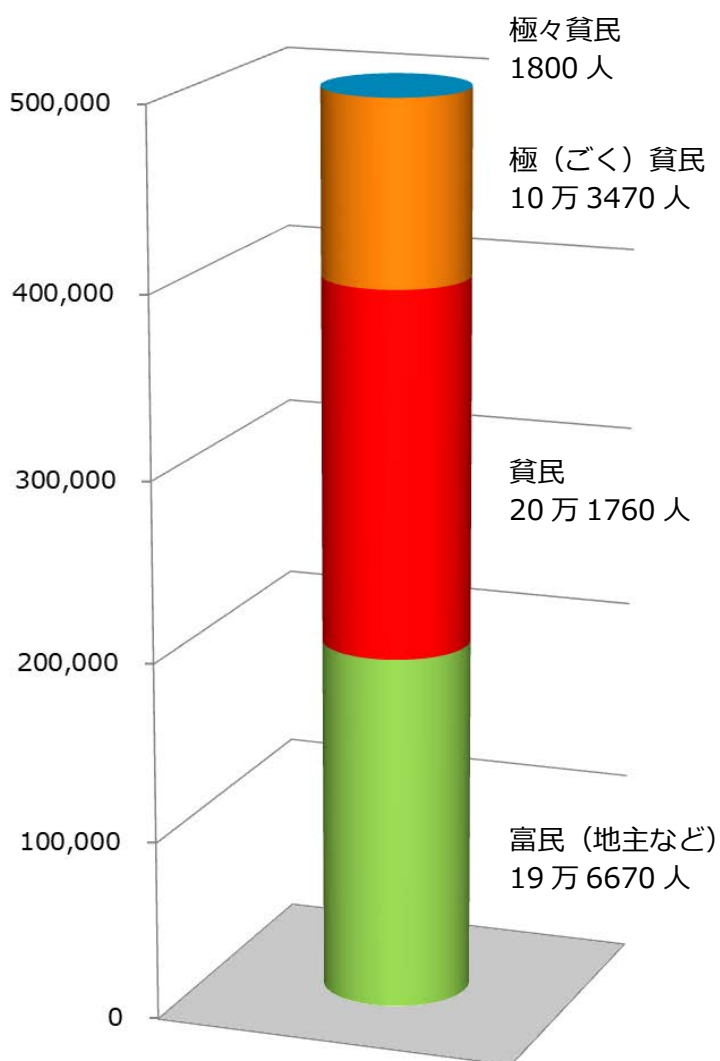
町人の人口は合計で約五十万三千七百七十七人でした。

富民とは土地や建物を所有している町民です。

この調査では富民以外は貧民とされ、より貧しい極貧

民なども合わせると、東京府の町人の六十%は貧民・極

貧民・極々貧民のいずれかでした。



生活に困った人を助けるしくみ

江戸時代は、* 飢饉で作物がとれなかったり、お米の値段が急に高くなったりして、たくさんの方が食べ物を手に入れられなくなるようなことがたびたび起きました。

そこで江戸では、お米やお金を蓄えておいて、多くの方が生活に困るような自然災害や飢饉が起きた時に、その蓄えを困った人に分け与えて命を助ける制度がありました。そのお金や米はどうやって集めていたのでしょうか。

江戸全体は幕府の土地でしたが、町人が住む町人地では、裕福な町人が幕府や大名から土地を借りて長屋という住宅をつくりました。江戸の町人のうち、長屋を人々に貸す人（地主・家主）が三〇%で、七〇%の町民は家賃を払って長屋に住んでいました。地主たちは集めた家賃などから町の運営費を払う義務がありました。集めた運営費は、水道や道の修理、每晚閉める町の門の管理などの仕事に使われました。

その運営費をできるだけ節約し、余ったお金の七〇%をお米やお金として蔵に蓄え、自然災害などが起きたときに人助けに使うしくみが江戸に作られていました。この制度を**七分積金**といいます。

七分積金の制度は、幕府の政治の中心にいた松平定信の命令で始まりました（寛政の改革）。

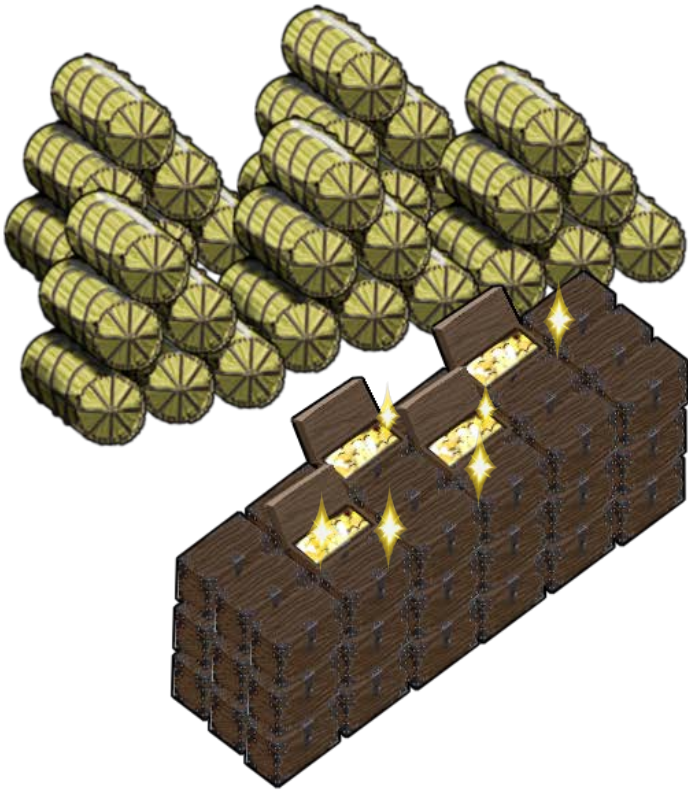
集められたお金やお米は蔵に保管し、それを管理する事務所として浅草に町会所という施設が作られました。

町会所の仕事は奉行所と地主が担当していました。江戸幕府が終わり、江戸城の明け渡しするとき、七分積金の制度は明治政府に引き継がれました。七分積金の制度を明治政府に引き渡したのは、幕府の代表者の一人大久保一翁です。



* 飢饉（ききん）…寒さ、日照り、洪水（こうずい）、地震、害虫の異常（いじょう）発生、作物の病気などが原因で作物が育たず、多くの方が命を落とすほどの食糧（しょくりょう）不足になること

江戸城が明け渡され、江戸に住む住民が半分になり、毎日の食べ物にも住む場所にも困る貧しい人があふれた東京で、まさにこういうときのための七分積金で蓄えられたお米やお金はどうか生かされたでしょうか？



ほかのことに使われてしまった 七分積金

明治五年、七分積金を地主たちが管理していた町会所は廃止され、東京のお金持ちの商人たちによる**営繕会議所**という新たな団体が作られました。

営繕会議所は七分積金で蓄えたお金で道路や橋を作り直す団体でした。「営繕」とは建築物を修理したり新たに作ったりすることです。七分積金は、東京をヨーロッパの都市のような町に改造するための資金として使われたのです。営繕会議所は発足して一か月で**東京会議所**と名前を変えました。

このころ、渋沢栄一は大蔵省に勤めていて、営繕会議所の運営には関わっていません。

まめちしき…幕府の大久保一翁は、蘭学(らんがく)を学んで江戸に塾を開いていた勝海舟に、外国の攻撃(こうげき)から日本を守る方法について幕府へ意見書を書かせました。これがきっかけで勝海舟はのちに幕臣(將軍の家来)に採用されました。

七分積金の本来の使い道を求めた

おおくぼ いちおうふ ちじ
大久保一翁府知事

明治五年、**営繕会議所**が七分積金を使って東京の町づくりをはじめたとき、東京府知事に就任したのが**大久保一翁**でした。七分積金の制度を新政府に引き渡した人物です。

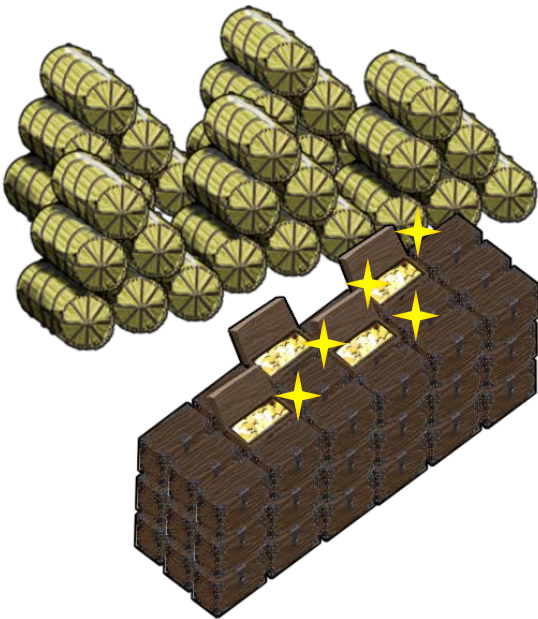
大久保一翁府知事は、**営繕会議所**に対して、生活できず^{こま}に困っている人の救済^{きゅうせい}はどうするつもりなのか？と回答^{かいとう}を求めました。



東京府知事
大久保一翁（いちおう）

営繕会議所は府知事に三つの案を提出^{あん}しました。

- ① 働く場所として、会社に工場をつくらせる。
- ② 人力車引き、草刈り、お堀の底にたまる土砂の撤去^{じんりきしゃ}などの作業をする人を雇^{ほり}う日雇会社を作る。
- ③ 子ども・高^{こう}齢^{れい}・病^{びょう}気^きなどの理由で会社の仕事ができない者については、長^{なが}屋^やをつくって住まわせ、病^{びょう}気^きの治療^{ちりょう}や子どもの教育を行う。



まめちしき…貧しくて食べるものもない人を住まわせるため、明治2年に東京府は教育所（きゅういくじょ）という施設を3か所つくりました。教育所で出された食事の米は七分積金の米が使われました。教育所は明治4年に廃止されました。

いそ 急いで東京中の浮浪者を隠せ

ふろうしや かく

同じころ、ロシア皇帝の皇子（四男アレクセイ）が日本を訪問することになりました。明治政府は東京中の道端に貧しい人たちがたくさんいることを大変な問題と考え「外国の大事なお客さんに東京中の貧しい人たちを見られるのはみつともない。この人たちをどこかに集めよう」と計画しました。

そして、ロシア皇子が通る予定の道路近くにいた浮浪者二百四十人が、元加賀藩の屋敷の中にあつた長屋に集められました。

このときは臨時の收容場所でしたが、生活が苦しい貧しい人を收容する施設を新たにつくることになりました。明治六年に上野のお寺があつた場所に作られたその施設は**養育院**と名付けられました。

営繕会議所がつくつた案のうち三番目がこうして実現しました。

ただ、やはり七分積金の主な使い道は、町づくりの工事の費用でした。

養育院が始まつた明治六年、渋沢栄一はまだ養育院には関わっていません。

大久保一、渋沢栄一を

七分積金の管理役に

明治六年、渋沢栄一（三十三歳）は人生の大きな節目を迎えていました。

大蔵省を退職して、ヨーロッパ式の商工業を日本で盛んにする夢に向かって踏み出しました。まず日本最初の銀行「第一国立銀行」を設立し、それから商工業の会社づくりを始めました。

翌年、渋沢栄一は大久保一翁府知事に依頼され、東京会議所の運営メンバーに加わるようになりました。東京会議所は、宮繕会議所の名前が変わったものです。渋沢栄一が七分積金の使い方全般を管理することになったのです。

一八七六（明治九）年には、東京会議所の代表者（会頭）と養育院の代表者（事務長）に就任します。

渋沢栄一と養育院を結びつけたのは大久保一翁でした。

しぶさわさんの大きな銅像が建てられる五十年前のことです。



江戸時代、大久保一翁は幕府で西洋の情報を集める役所の代表者になっていました。

そのとき、西洋社会の知識をもとに、貧しい人の病気を西洋医学で治療したり、保護者のいない子どもを約 300 人まで預（あず）かって育てたりする「**幼病院**（ようびょういん）」を江戸に設置することを幕府に提案しました。しかし、この提案は幕府ではとりあげられませんでした。

幼病院のアイデアは、一翁が府知事になって、養育院として実現したといえます。

まめちしき…明治 5 年に大久保一翁府知事の名前で出された「乞食（こじき）廃止（はいし）令」では、「乞食に米やお金を与えると怠け者になる。米やお金を与えた者には罰金をとる。体が不自由で住むところもない者は会議所が保護する。」という内容が書かれています。

渋沢栄一の七分積金の使い方

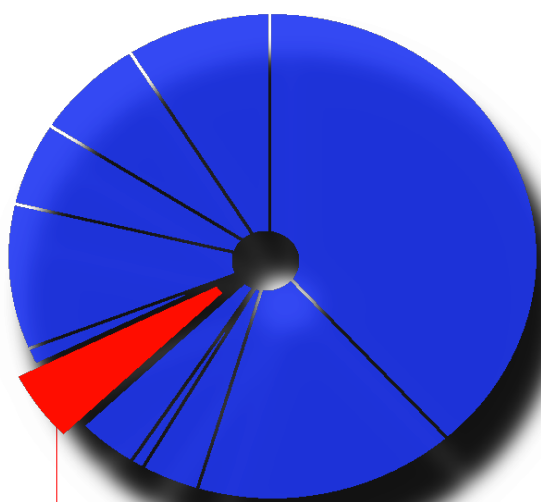
さて、渋沢栄一が七分積金の管理役になって、お金の使
い道はどのように変わったのでしょうか。

まちづくりの工事費用ひょうでなく、貧しい人の生活を助け
るために使われるようになったのでしょうか。

このグラフは、養育院が始まった明治五年から、渋沢栄
一が七分積金の管理役になり、さらに会議所と養育院の
代表者になった明治九年までの七分積金の使い道です。

青の部分

水道・道路・橋の整備、小学校の建設、広
い墓地づくり、ガス局の経費、会議所の仕
事にかかるいろいろな費用など



養育院の運営費用

七分積金の大半は町づくりに使われています。

この時期の渋沢栄一が目指していたのは、商業・工業を
運営する人たちが江戸時代から明治時代になっても
「最下位の身分」とみなされつづけている状況じょうきょうを変える
ことでした。商工業は金もうけの欲よくしか考えていない卑
しい仕事など考える人が多かったのです。



渋沢は、ヨーロッパのように商業・工業が盛んで、商人た
ちが政治家や役人たいとうと対等の身分として扱あつかわれる新都市
をつくろうと奮闘ふんとうしていました。

しかし 東京をヨーロッパ式の都市に作りかえるには
多額たかくのお金が必要たかくです。明治政府や東京府庁にはお金が
不足していました。そこで七分積金が使われてしまったの
でした。

東京でたくさん会社や工場ができて商工業が盛んになれば、貧しい人たちも仕事に就いて、お金を稼いで、生活できるようになるように思われます。しかし実際は、家も食べ物もない貧しい人の数は減りませんでした。

渋沢栄一が養育院の事務長になると、今度は商工業者に対する偏見とは別のひどい偏見に直面しました。

貧しい人を助けるのは良くないと考える人がたくさんいたのです。「貧しい人を助ける慈善事業をやる者は、お寺のお坊さんか、金持ちの道楽か、よほどの変人」といわれていました。また「養育院は怠け者を甘やかして、ますます貧しい人を増やす」と批判する人が少なくありませんでした。



渋沢栄一、養育院院長になる

渋沢栄一が東京会議所や養育院の代表者になった明治九年から、東京会議所の仕事の多くは東京府の仕事に切りかわりました。

養育院も東京会議所による運営から東京府庁が管理する施設になりました。

一八七九（明治十二年）、養育院の事務長という役職名は院長に改名されました。これにより渋沢栄一事務長は、**渋沢栄一院長**になりました。

養育院の運営に必要な七分積金は残り少なくなり、この年から東京府のお金で運営することになりました。

渋沢栄一が養育院院長になったときも「養育院は貧しい人を甘やかす悪い施設だ」という考えの人が多くいました。

「渋沢は惰民製造（怠け者を作り出す）の本尊（中心になっっている者）だ」と言う人もいました。

東京府のお金で養育院を運営するようになると、東京府議会の議員からも「養育院があるせいで貧民が増え、府庁の出費は増えるばかりだ」「養育院は廃止すべきだ」という声があがりました。

渋沢栄一が院長になって二年後の明治十四年には東京府議会で「養育院廃止案」が提出されました。このままでは養育院は廃止されます。

院長になったばかりの渋沢栄一は養育院をなくさないよう東京府知事や議員を説得しました。

さて、渋沢栄一はどのような考えを示して、養育院の存続を説得したのでしょうか？



養育院の存続を説得

そのころの渋沢栄一は、生活できないような貧しい状態になる人についてこう語っています。

社会の役に立とうという気持ちが全くなく、自分の都合しか考えない。人生で何が大事かの考え方が間違っている。怠けたがるし、無駄づかいもする。そういう人間が貧しくて苦しむのは自分が悪い。「自業自得の輩（自分の行いのせいで苦しむことになった者たち）」である。

当時の渋沢栄一は、貧困の原因は個人の心の問題と考えていました。現代でも、不景気になって失業者が増えた時は、「自分のせい」「**自己責任**」という意見の人が多くいます。

「貧しさで苦しむことになる原因」について、渋沢栄一と「養育院を廃止せよ」と言う人たちとでは、考え方はどこがちがうか、あるいは同じか。考えてみましょう。

渋沢栄一院長は、どういう理由で養育院は必要だと主張したのでしょうか。こう語っています。

自業自得の輩にぜいたくな生活を与えてまで保護すべきとは言わないが、食べ物も着るものもなく、飢え凍えるとわかってる者をほっておけないではないか。

中国の古い学問でもいうように、困っている人をかわいそうに思い、助けようとする心が人間はもともとある。ヨーロッパの国々でも貧しい人を助ける活動が盛んにおこなわれている。

貧しい人を助けるのは東洋でも西洋でも共通の、人間の正しい行い(人道)である。

養育院のような施設を無くすような政治は、正しい政治ではない。

こうして渋沢栄一は、「貧困は個人の自己責任だが、救うしくみが社会には必要だ」という説明で養育院の存続を説得したのでした。

この渋沢の考えはのちに大きく変わりますが、それはまだ先の話です。

いったんは養育院廃止案はなくなりましたが、再び府議会では養育院廃止案が出され、**養育院の廃止**が決定されてしまいました。

しぶさわさんの大きな銅像ができる約四十年前のことです。

養育院は廃止するの？



養育院は自分がひきとる



養育院の廃止が決まると、渋沢栄一は仲間に協力を呼びかけて、自分で運営することを東京府に申し出ました。

東京府からはもう運営のお金は出ません。渋沢栄一がお金を確保かくほする方法を考えて養育院を存続そんぞくさせるといいます。

一八八五（明治十八）年から、養育院は渋沢栄一個人こじんの私営施設しえいになりました。

そのとき渋沢栄一はお金持ちになっていましたが、養育院の費用を全部出すほどのお金はありません。

そこで渋沢は、将軍の弟たちとヨーロッパに行ったときに見たお金集めの方法を実行することにしました。

それは、お金持ちに呼びかけて寄付金じゆきんを集めるという方法です。

貧しい人を助ける資金しきん集めの方法のひとつとして、お金持ちが不用なものを持ち寄り、売り買ひするバザーかいさいも開催かいさいしました。

バザーは、渋沢栄一の奥さんがリーダーになり、お金持ちの家庭の奥さんたちがグループをつくって開催かいさいしました。



養育院運営のためのバザー

寄付金集めはたいへん効果があり、多くのお金を集めることができました。

それでも養育院の運営をまかなうのに十分なお金を集めるのは大変なことでした。

渋沢栄一院長の給料は、ありませんでした。

寄付金集めは、その後の渋沢栄一の人生でも、*福祉の活動に必要なお金を集める方法としてよく使われました。

渋沢栄一はいつも大きな袋を持ち歩いていて、大金持ちから寄付金を集めていたそうです。

養育院、東京市の市営施設に

一八八九（明治二十二年）年。東京府の中に東京市が置かれることになりました。

そこで渋沢は、東京府知事と東京市長に交渉して、養育院を東京市の運営にすることに成功しました。

東京府の議会（府会）や東京市の議会（市会）でも順調に承認され、養育院は東京市のお金で運営する施設になりました。

渋沢栄一が個人で養育院を引きつぎ、さらに東京市営の交渉に成功しなければ、明治五年に始まった養育院は明治十八年までの約十年の歴史で終わっていたでしょう。

東京市からのお金の支給は十分ではありませんでしたが、渋沢栄一個人もお金を出し、寄付金集めも続けたので、新しい建物へ引っ越したり、優秀な職員を雇ったりすることができるようになりました。



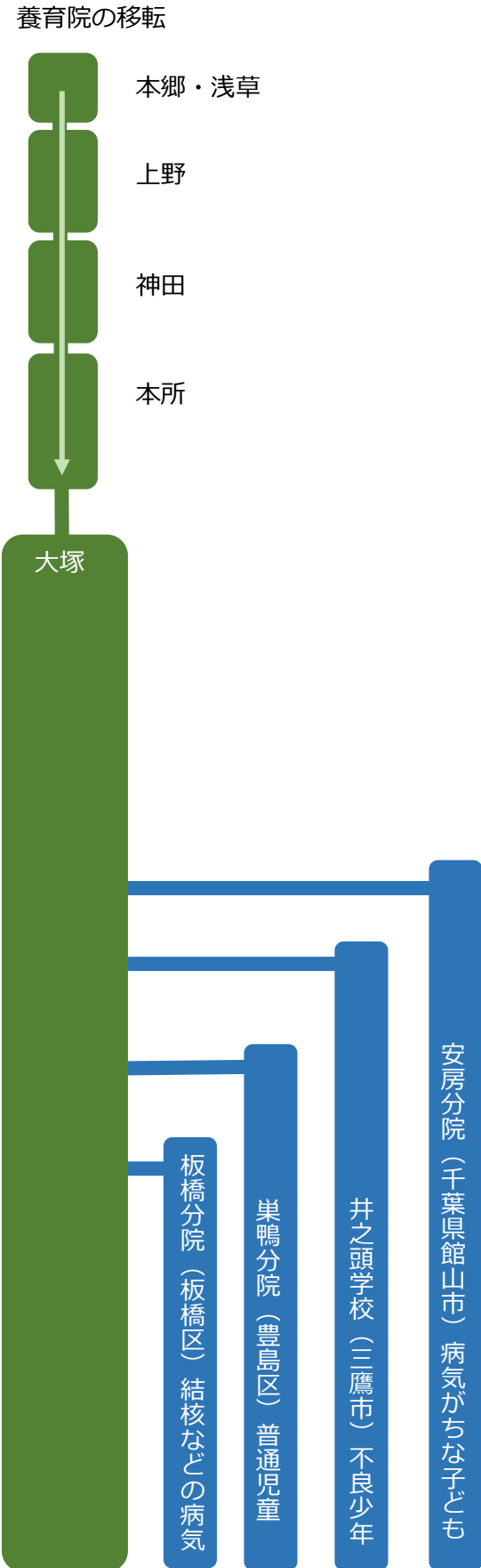
*福祉…「しあわせ」という意味と、「生活の安定のため援助（えんじょ）がうけられるしくみ」という2つの意味があります。

養育院では、ひとつの施設の中にさまざまな人が暮らしていました。老人・幼児・精神病の人・治療方法がまだない感染症の人・体に障がいを持つ人、仕事をする体力のある健康な大人・悪い行動が身についた非行少年、病弱な子どもなどです。

渋沢栄一がお金集めをして養育院運営を行っていたときから市営になってしばらくは、養育院は本所（墨田区）の古い建物で運営していました。そこは狭いだけでなく、あちこちが壊れ、雨が降ると地面に汚水があふれるような、健康にもよくないところでした。

百人ぐらいしか住めない施設でしたが、そこに六百人の生活困難なさまざまな年齢・状況の人が集められていました。

東京中の生活困難な人は増える一方で、本所の施設ではとても対応できません。養育院のための新たな土地さがしが行われ、東京市の運営になって七年後に大塚（文京区）に、より大きな施設をつくりました。



養育院が本所から大塚に移転したあと、渋沢栄一院

長は、部下の安達憲忠あたちけんちゆう ていあんの提案をもとに、大塚以外の場所

に、子どものための施設や治りにくい病気の人のための

施設などの専門施設をつくっていきました。これを養育

院分院ぶんいんといいます。いままで一つの建物に集めていた人

を、その人の事情に合わせた専門施設に分けていったの

です。

分院づくりだけでなく、看護師かんごしの養成所ようせいじよや、仕事さが

しのための職業紹介所ししょくかいじょう、仕事をさがしている貧しい人

のための宿泊所などの専門施設も増やしていきました。

渋沢院長と安達憲忠にんさんきやくは二人三脚で、養育院の役割を

広げていきました。



分院に注目すると、三つは子どものための施設である

ことがわかります。

当時は子どもが何人もいる家庭も多く、生活できない

ほど貧しい状態になると、子育てができず、不幸な状態に

なる子どもがたくさんいました。両親が亡くなって住むと

ころもない子ども、育てることができず教会や病院の前

に置かれた赤ん坊、家出した子どもなど、貧しさがもたら

すさまざまな事情で家族を失った子どもが毎年養育院に

つれてこられました。からだが弱って病気になっている子ど

もも少なくありませんでした。

養育院では、そうした子どもたちを預かりあず、健康状態

を良くし、保護者ほごになってくれる人をさがしたり、働いて

生活できるようにすることが、大きな課題かだいになっていまし

た。

まめちしき…渋沢栄一は養育院に月2回出勤（しゅっきん）していましたが、ほかの仕事も忙しく、のちに出勤は月1回になりました。七分積金制度をはじめた松平定信が亡くなった日が13日で、その日を毎月の出勤日に決めていました。

貧困で苦しむ人が急増

ひんこん

きゆうぞう

養育院の仕事が広がった理由は、東京市営になって運営に使えるお金が増えただけではありません。貧しい生活になる人の数が、養育院が始まった明治初めるときよりもはるかに多く、急激きゆうげきに増えていたのです。貧しい人が増えることを止めなければ、養育院の施設をいくら大きくしたり分院を増やしたりしても追いつきません。

「貧困は、その人の生き方・考え方が誤あやまっているせいだ。しかし貧しくて命の危険がある人たちを救う施設は必要だ」という考えでは、貧しい人が明らかに増え続けている現実を止めとることもできず、困った人を助ける事業を盛んにすることにも限界げんかいがあることを渋沢栄一は実感していました。

ではなぜ、東京で貧しい人の数が急に増えたのでしょうか。

そのころ、渋沢栄一のもう一つの仕事である商工業の世界で大きな変化が起きていました。

養育院が大塚に移転する少し前に日清戦争、大塚への移転から約十年後に日露戦争にちろがありました。

この二つの戦争を機会に、日本政府は軍事力を高めることと産業の振興しんこうにいつそう力をいれるようになります。

政府は鉄道・土木工事しんじゆの拡大や製鉄や造船などの重工業の振興しんこうに積極的せつきよくにお金を出しました。日本中に大きな会社はってんができて商工業が発展しました。



戦争が終わってしまえばらくはとても景気が良くなったのですが、そのあとひどい不景気が始まりました。

物の値段は高くなる一方でしたが、給料は増えず、生活が苦しくなりました。

また、工場の作業の機械化が進んで作業員が減らせ、失業する人も増えました。

東京だけでなく、日本全国で不景気・物の値上がり・失業が起こり、生活が苦しい人が仕事を求めて東京に集まってきました。

これでは貧しい人を助ける施設をいくら増やしても、みんなを助けることなどできません。

そのような状況でも、政府は貧しい人を助ける事業にはあまりお金を出しませんでした。

渋沢栄一、

ひんこん

貧困問題の考え方が変わる

日露戦争のころから、渋沢栄一は養育院だけでなく、より幅広く、貧しい人たちの問題への対処に関わりはじめます。

まず中央慈善協会という団体をつくり、その会長になりました。

日本全体で貧困が深刻になる中、養育院のような事業を少ない資金で細々と運営している団体が日本各地にありました。

そうした全国の団体の意見を集めて要望をまとめ、政府と交渉することが中央慈善協会の主な役割でした。

中央慈善協会がスタートすると、渋沢は貧困の原因とその対策について、いろいろな機会で自分の考えを演説するようになります。

●「すでに困っている人を救う」という日本全国の事業は、資金しきんもないし、貧しい人が増える一方では、とても十分な対応はできない。

●第一にすべきことは「人々が貧困におちいらないようにする防貧ぼうひん」である。

●貧しい人が増える原因は、商工業の発展による利益りえきが一部の大金持ちに集中するようになったこと。大企業を経営する、世の中のひとにぎりの人が大金持ちになる一方で、多くの働く人は物の値段が上がるのに賃金ちんぎんが上がらず、不景気になれば、失業者が増える。豊かな人と貧しい人で収入にあまりに大きな格差かくさが生じる社会になったこと。これが貧困者ひんこんが増え続けている原因である。

●「貧困はその人の個人の責任、自業自得じごうじとく。しかし困っている人を助けるのは当然。」という考え方は、日清・日露戦争後の貧困者の増加を止められない。

●政府や商工業のいまのあり方が貧困をもたらししている現状げんじょうを正さなければならぬ。

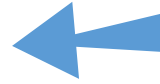
渋沢栄一が院長になってすぐ養育院の廃止はいしが決定されたときの渋沢栄一の考えは「貧困は個人の問題だが、困っている個人を助けるしくみは必要（個人が原因の貧困を救う、思いやりの心での救貧きゅうひん）」でした。

その考え方は日露戦争にちろのあたりから大きく変わりました。

「社会のしくみが原因で、とても救いきれないほどたくさんの方が貧困におちいるようになった。貧困をもたす社会のありかたを変えて、貧困を防ぐ必要がある（社会がもたらす貧困を防ぐ防貧ぼうひん）」。

渋沢栄一の考えは「救うべき人を助ける施設づくり」から「救うべき人そのものをなくす社会づくり」に大きく変わったのです。

貧しい人を救う必要



貧困が生じない社会



その考えの変化を渋沢栄一が行動に移したはじまりは
一九〇八（明治四十一年）年の中央慈善協会ちゅうおうじぜんきんきょうかいの設立でし
たが、その翌年に自分が関わっていた多くの会社の役職を辞
めて、商工業の世界から離はなれていきました。

しぶさわさんの大きな銅像が建てられる約二十年前の
ことです。

再び大きな戦争

渋沢が中央慈善協会を立ち上げてからまもなく、再び
大きな戦争がはじまりました。第一次世界大戦です。

第一次世界大戦では、戦争に参加した国々から戦争に
使う物資ぶつしなどの注文が日本に集まり、輸出ゆしゅつが増えました。
国内では重化学工業じゅうがくがうぎょうが一層盛んになり、日本は工業国に
なりました。

一部の大企業は子会社をつ
くってさまざまな産業に事業
を広げ、巨大なグループ企業
を形成しました。これを財閥ざいぼつ
といいます。

重工業の発展



まめちしき・・・大塚本院の場所には関東大震災の被害者のための小さな病院が作られました。これが現在の東京都大塚病院のはじ
まりです。

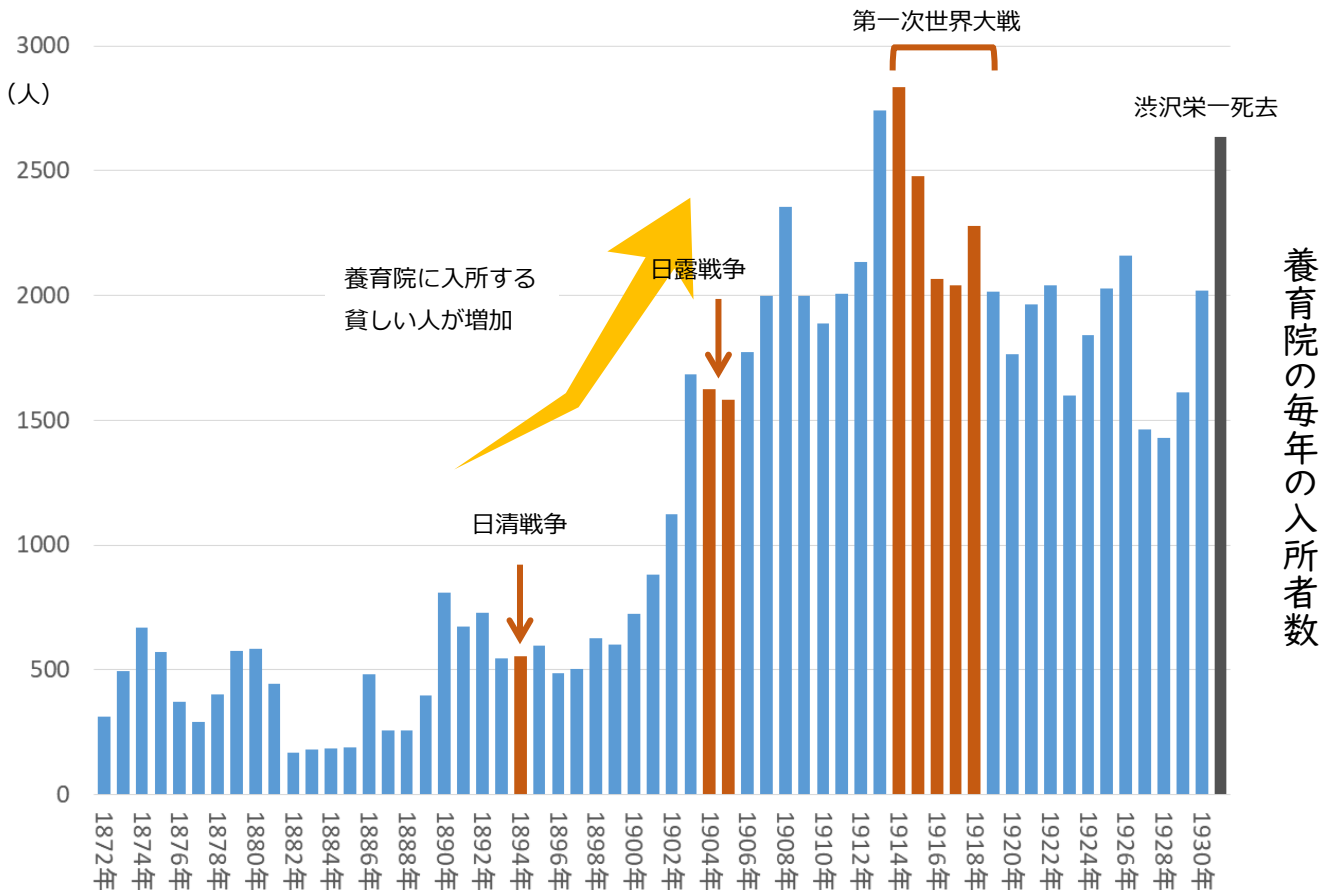
船での物資輸送や鉱山の運営を始めた新企業では、短い期間で大きな利益を上げるようになりました。こうした会社で大金持ちになった経営者は、成金とよばれました。

会社や工場で働く人たちの生活はどうなったでしょうか。

やはり給料は上がりませんでした。

一方で、お米など生活に必要な商品の価格が何倍にもはね上がり、日露戦争のあとよりも、貧しい人たちの暮らしはますますひどい状態になっていきました。

渋沢栄一が「貧しい人をつくりださない社会づくり」を盛んに訴えている最中に、再び大きな戦争をきっかけに「ひどい貧しさに苦しむ人を、さらに多く生み出す社会」がはじまってしまったのです。



まめちしき・・・1970年代に、板橋の養育院の敷地に高齢者専門病院・老人総合研究所・老人ホームなど、高齢者の健康に関する施設が作られました。

道徳経済合一説

第一次世界大戦が終わり、日本中で貧困が深刻になる中、渋沢栄一は一九一六（大正五）年ごろから道徳経済合一説という考え方を主張しはじめます。道徳経済合一説とは次のような考え方です。

●理想の社会とは、すべての人が安定して生活できて、共存できる社会である。

●政府であれ商工業であれ、目指すものは、だれもが衣食住に困ることなく、生活が安定する社会の実現である。

●商工業の役割は、人々の生活に必要なものを作って社会に提供することを通して、理想の社会づくりに貢献することである。

●政府の役割は、法律や制度を整備し、商工業の発展を妨げるようなことはせず、社会を改善していくことである。

渋沢栄一は六十九歳のときに自分が関わっていたほとんどの会社の役職を辞めましたが、大正五年七十七歳のとき、それまで続けていた二つの銀行の役職も辞めて、産業の世界から引退しました。

その後の人生では、亡くなるまで社会の問題を改善する活動に取り組みました。



渋沢栄一が関わった団体

- 東京府慈善会
- 救済事業大会
- 東京風水害救済会
- 埼玉共済会
- 協調会
- 国際連盟協会
- 滝乃川学園
- 大震災善後会
- 恩賜財団慶福会
- 日米親善人形歓迎会
- 東京方面事業後援会
- 中央盲人福祉協会
- 全日本方面事業連盟
- 癩予防協会

養育院、板橋へ

こんりゅう

そして銅像の建立

第一次世界大戦が終わり、渋沢栄一が道徳経済合一

説で唱えた「貧困のない社会」づくりに向けて活動をは

じめた五年後、マグニチュード八以上と推定される巨大

地震「関東大震災」が発生しました。

渋沢栄一は内務大臣

に呼ばれ、内務省に協力

して救護活動や救援施

設の設置を進めました。

大震災では養育院の

大塚の建物が壊れまし

た。



大震災で壊れた養育院（写真 東京都健康長
寿医療センター蔵）

そのため養育院は、板橋の新しい建物に移転しました。

分院もそれぞれ運営を継続しました。移転から二年たっ

た一九二五（大正十四）年、渋沢栄一が八十五歳のとき

板橋の養育院の敷地にしづさわさんの大きな銅像が建て

られました。

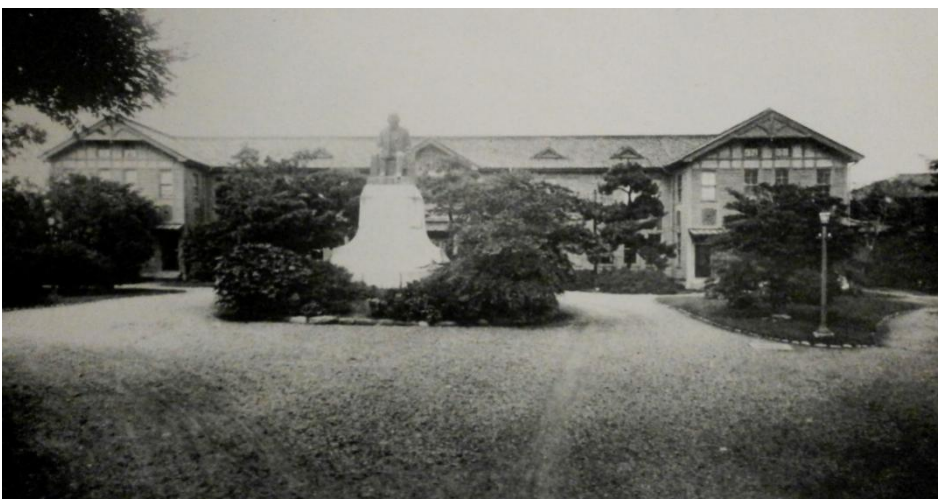
自分の銅像が建てら

れる計画に渋沢栄一

は反対しましたが、東

京市長の説得でしづさ

わさん了解しました。



板橋の養育院と銅像

まめちしき…養育院収容者の専門病院だった養育院附属（ふぞく）病院は、1972（昭和47）年から都民対象の高齢者専門病院になりました。その後、病院は1986（昭和61）年に東京都老人医療センターに名前が変わりました。

銅像が完成した式典での渋沢栄一のあいさつより、その一部分を抜き出します。漢字をひらがなに換えたり、文章を現代の言い方に直した部分もあります。

完成したときも、やはり渋沢栄一は銅像を望んでいないことがわかります。理由ははっきりしません。

「実は昨年末、私のために銅像をお建て下さるといってお企てについて一応お話しをうけたまわりました際、私は極力これをご辞退申しあげたのですが、発起人（＝計画をすすめた人たち）方のご熱心なご勸説（＝説得 せつとく）もですがたく、ついにご厚意にまかせることといたしましたものの、私としては別にとりたててもうすほど功績があるわけでもなく、ただ五十年間養育院事業を経営したという事だけで、かかる過分（自分にふさわしくない）な名誉をにないまする事は、心中はなはだ心苦しう感じていた次第でございます。」（竜門雑誌 第四四八号 大正一五年一月より）

どうして渋沢栄一は自分の巨大な銅像が作られるのを断ったのでしょうか。

その時期、渋沢はどんな思いで貧困問題に取り組んでいたのでしょうか。

もし東京市長の呼びかけで銅像を作る多額のお金が集まるのなら、ほかにやってほしいことがあったかもしれません。

あるいは、自分が目指している社会の実現はまだ遠いと思っていたかもしれません。

銅像づくりを断ったときの気持ちは渋沢栄一ご本人にしかわからないことですが、理由を想像してみてください。



銅像建立、その後

中央慈善協会ちゆうおうじぜんきぎょうかいをつくり、道徳経済合一説どうとくけいざいごういつを唱え、さま

ざまな社会改善団体かいぜんを立ち上げる。同時に安達憲忠あだちけんちゆうと

二人三脚ににんさんきゃくで養育院事業を拡大していった渋沢栄一。

渋沢栄一は銅像が建てられてから六年後、九十一歳で

亡くなりました。亡くなるまで養育院長の役職を続け

ただけでなく、社会に対して次のようなことをずっと主張

し続けました。

●産業の世界に対して：財閥ざいばつや成金なりきんは、商工業の利益りえきをひとりじめしてぜいたくな生活にひたっている。物の値段が上がっているのに、なまけやすくなるからと言って賃金は上げようとしないため、人々の生活がますます苦しくなっている。

●政治家や政府に対して：物の値段じやうじやうの上昇じやうじやうをおさえる取り組みをしない。政府の予算の半分を軍事の費用にあてている一方、貧困対策にはお金を出さない。利益が出る事業は民間の会社にやらせず、政府が経営してしまう。

しかし、日本の社会では次のような状態じやうたいがずっと続いていました。

- 貧しい人の保護は家族や親類まかせて、保護する人たちもいっしょに貧困おちいに陥ることが多い。
- 「助けようとするから貧民が増える」と考える人が多い。
- 大儲けもくしてぜいたくな生活をしている経営者にあこがれる。
- 貧困問題についての研究者が少ない。

まめちしき・・・2000年（平成12）年に東京都養育院条例が廃止され、都庁に「養育院」という名前の組織は無くなりました。

渋沢栄一が亡くなつたあとの日本な

三つの戦争を経て、日本の商工業は大発展しました。

しかしそれは若いころに渋沢栄一が考えていた「多くの人から少しずつお金を集め、社会に役立つ仕事で利益をあげ、会社の利益をその人たちに分配ぶんぱいすることで社会全体が豊かになる**合本主義**がっほん」のような社会ではありませんでした。

財閥や成金なりきんなどごく一部の人だけが極端きょくたんに豊かになる一方で、貧困で苦しむ人が増える社会になってしまいました。

渋沢は現状を強く批判ひはんし、「すべての人の生活が安定して、全員が共存できる社会」を理想とする道徳経済どうとくけいぎ合一説ごういつせつを盛んに主張しましたが、社会を変えることはできませんでした。

渋沢栄一が亡くなった後も、経営者けいえいしやなどの一部の人たちが会社の利益りえきを独占どくせんして大金持ちになる一方で、多数の働く人が貧困に苦しむ状況は続きました。

政府も、軍事と産業振興しんこうにお金を使い、貧困問題への取り組みには消極的でした。

国民の不満が高まる中、日本は、満州事変・日中戦争まんしゅうじへん・太平洋戦争と、戦争の時代に進んでいきました。



安定した生活を得て生きる権利

三度の戦争による商工業の発展と貧困の深刻化に直面した渋沢栄一が考えた道徳経済合一説。それは渋沢栄一が若いころから学んでいた論語などの中国の学問を元に考え出したものと言われています。

商工業が発展して、貧困で生活が苦しくなる人が増えたのは、同じ時代、日本だけでなくヨーロッパも同様でした。生きていくことが難しいほど貧困問題が深刻になったヨーロッパでは「貧しさで命が脅かされることなく生活する権利」という考え方が広まりはじめました。

これを**生存権**といいます。

第二次世界大戦が終わると、国民の生存権を守ることが憲法に明記する国々が現れました。

日本の憲法にも生存権の項目があります。

日本国憲法第二十五条

すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。

2 国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。

生存権というの



日本ではこの項目に基づいて、働く人の最低賃金、生活保護、国民健康保険、介護保険、学校で教育を受ける費用の援助、障がい者の自立支援などの法律や制度がつけられています。

現代の日本でも貧困の問題はまだあります。しかし、生存権という考えが憲法に取り入れられたことで、渋沢栄一が道徳経済合一説で示した目指すべき社会の姿に前進したと言えるでしょう。

生存権の考えは、*国連が定めた人権宣言や人権規約にも書かれています。生存権を認め、守ることが、世界のすべての国が実現すべきこととして宣言されているのです。

国連が一九四八（昭和二十三）年に採択した世界人権宣言

一、すべて人は、衣食住、医療及び必要な社会的施設等により、自己及び家族の健康及び福祉に十分な生活水準を保持する権利並びに失業、疾病、心身障害、配偶者の死亡、老齢その他不可抗力による生活不能の場合は、保障を受ける権利を有する。

私が主張し続けた社会のあり方と通じるものがある。



国連が一九六六（昭和四十一年）年に採択した国際人権規約 A 規約

第十一条

この規約の締約国は、自己及びその家族のための相当な食糧、衣類及び住居を内容とする相当な生活水準についての並びに生活条件の不断の改善についてのすべての者の権利を認める。締約国は、この権利の実現を確保するために適当な措置をとり、このためには、自由な合意に基づく国際協力が極めて重要であることを認める。

国連の旗



*国連（こくれん）…国際連合（こくさいれんごう）。国際平和、経済・社会・文化などでの国際協力の実現を目的とする国際組織。1945年に設立。2020年現在193か国が加盟している。

一九九一（平成三）年に国連総会で採択された「高齢者のための国連原則」にも、生存権の考え方が生かされています。

高齢者のための国連原則

一九九一年十二月十六日、国連総会は「高齢者のための国連原則」を含む決議46/91を採択した。政府は自国プログラムに本原則を組み入れることが奨励された。

（自立：Independence）

高齢者は、

- ・収入や家族・共同体の支援及び自助努力を通じて十分な食料、水、住居、衣服、医療へのアクセスを得るべきである。

- ・仕事、あるいは他の収入手段を得る機会を有するべきである。

- ・退職時期の決定への参加が可能であるべきである。

- ・適切な教育や職業訓練に参加する機会が与えられるべきである。

- ・安全な環境に住むことができるべきである。

- ・可能な限り長く自宅に住むことができるべきである。

（参加：Participation）

高齢者は

- ・社会の一員として、自己に直接影響を及ぼすような政策の決定に積極的に参加し、若年世代と自己の経験と知識を分かち合うべきである。

- ・自己の趣味と能力に合致したボランティアとして共同体へ奉仕する機会を求めることができるべきである。

- ・高齢者の集会や運動を組織することができるべきである。

（ケア：Care）

高齢者は

・家族及び共同体きょうどうどうたいの介護と保護を享受きやうじゆできるべきである。

・発病はつびょうを防止あるいは延期えんきし、肉体・精神せいしんの最適さいてきな状態たいでいられるための医療を受ける機会が与えられるべきである。

・自主性、保護及び介護を発展させるための社会的及び法律的サービスへのアクセスを得るべきである。

・思いやりがあり、かつ、安全な環境で、保護、リハビリテーション、社会的及び精神的刺激しげきを得られる施設を利用することができべきである。

・いかなる場所に住み、あるいはいかなる状態であろうとも、自己そんげんの尊厳、信念、要求、プライバシー及び、自己の介護と生活の質を決定する権利に対する尊重を含む基本的人権や自由きよを享受きやうじゆすることができべきである。

(自己実現: Self-fulfilment)

高齢者は

・自己の可能性を発展させる機会を追求できるべきである。

・社会の教育的・文化的・精神的・娯楽的資源を利用することができべきである。

(尊厳: Dignity)

高齢者は

・尊厳及び保障ほしょうを持って、肉体的・精神的虐待ぎやくたいから解放かいほうされた生活を送ることができべきである。

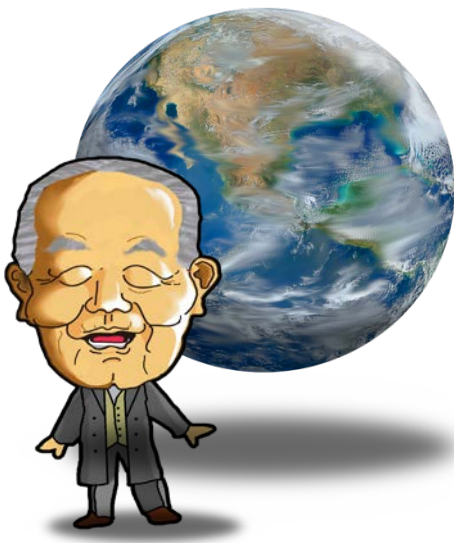
・年齢、性別、人種、民族的背景、障害等しょうがいとうに関わらず公平に扱われ、自己の経済的貢献こうけんに関わらず尊重そんちようされるべきである。

資料: 国連資料(内閣府ないかくふにおいて翻訳ほんやく)

渋沢栄一は「政府も商工業も、誰もが衣食住に困ることなく、生活が安定する社会をつくるためにある」という考えを、中国古来の学問を元に主張しました。

そこで渋沢が示した理想社会の姿は、第二次世界大戦後に世界各国の憲法に盛り込まれた生存権の考えを先取りしたものといえるかもしれません。

あるいはもしかすると、つねに欧米の進んだ社会のしくみを取り入れようと最新の情報を集めていた渋沢栄一は、第一次大戦以降にヨーロッパで広がり始めた生存権の考えを知っていたのかもしれませんが。



参考

東京市養育院『養育院六十年史』東京市養育院,1933年

東京都養育院『養育院百年史』東京都,1974年

渋沢栄一記念財団『デジタル版渋沢栄一伝記資料』<https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryo/digital/main/> (参照 2020年9月10日)

『櫻園（おうえん）通信』東京都健康長寿医療センター 養育院・渋沢記念コーナー,2013年～

大谷まこと『渋沢栄一の福祉思想 英国との対比からその特質を探る』ミネルヴァ書房,2011年

塩見鮮一郎『貧民の帝都』文藝春秋,2008年

松山 恵『都市空間の明治維新 江戸から東京への大転換』筑摩書房,2019年

水野博太「渋沢栄一における「道徳経済合一説」の形成過程」『思想史研究』 20,2014年 p40-55

大江清一「義利合一説の思想的基盤：三島中洲の義利合一説の考察」『埼玉学園大学紀要. 経済経営学部 篇』16,2016年 p13-25

内閣府『平成15年版高齢社会白書第2章 高齢社会対策の実施の状況 (1)国連における取組－第2回高齢化に関する世界会議－』<https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2003/zenbun/html/F2211100.html> (参照 2020年12月1日)

